

編集室から

先日、金沢で大学の恩師の祝賀会がありました。恩師は、昨年古希を迎えられたのですが、後に大学を移籍された京都で、そちらの卒業生を中心とする祝賀会。それなら古希+1として金沢でもお祝いをしよう!となったのです。

あいにく、この日は自分が代表を務める研究会の大きな講演会と開催時間の一部が重なっていました。会場の駅前のホテルで約100名ほどのご来場の方を前に開会のご挨拶を済ませ、そそくさと祝賀会会場の別なホテルへ。懐かしい諸先輩方のお顔が並んでいました。

賑やかに始まった祝賀会は、やがて司会の一存によって卒業生を指名してのスピーチに移ります。研究室1期生の大先輩から始めて、順番に年次がくだり、恩師の金沢最後の方に。やれやれ壇上に立たずに済んだと思いきや、司会は何を思ったのか、大トリに私を指名。ほろ酔いに不意打ちを食らった格好でした。

さすが工学部の元学生諸子は至って真面目で、諸先輩方のお話を飲食を止めて聞き入っておられます。先輩諸氏の大真面目なお話が続けていました。こういう流れになっていると、それを一気に変えてしまいたくなる気がムクムクと起こってくるのが、良くも悪くも自分の個性...(^^;ゞ

いつのまにか握ったマイクで、学生時代から続く波乱万丈・破天荒な生き方をお笑いモードで一気にまくしたてていました。締めにお世話になった御礼を抑えた口調で申し上げて席に戻ると、今度は来賓で前所属の社長が、手を挙げて私の話を補足。するとなんと恩師も「わしも一言補足」と壇上に。この型破りさは一生忘れられない人物で、それを支えているのは私の家内だと、身内にも言及していただいたの有難いお言葉。

元同僚の後輩からは「変わりませんね。北極星みたいな存在」と意味深なことを言われてしまいました。この夜、東京からのお客様をお待たせしていたので、二次会を失礼せざるを得なかったのが何より残念でした。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2012/06
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2012/06
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

水意月



かいだ
御嶽山と、開田高原
(蕎麦の産地)
by hama

寄稿 『日常と非日常の往来・島の暮らし』

(株)タウンマネージメント石垣 園長 西村亮一

「石垣島」と聞いて皆さんはどんなイメージを思い浮かべるでしょうか？青い海、青い空、満天の星空。一年中暖かく、ゆつくりと流れる時間の中で、のんびりとした暮らし……。私も八年前にそんな島の空気に魅せられて、石垣島に移り住んだ一人です。

沖縄本島から四百キロ以上も離れ、まさに日本の中の“南の島”で、私は、まちなか活性化と地域ブランドイングを主なミッションとしています。

石垣島の市街地は、半径二キロほどに市人口約四万八千人のほとんどが居住していて、その中心部に商店街や港、役所などが集中するコンパクトなまちです。全国の大都市と同じく、大型スーパー進出等の影響（市内に大型スーパーが六件も！）で、一時はかなり疲弊していましたが、観光商業へシフトすることで、息を吹き返しています。市民の日常と観光客の非日常が交錯する面白いまちといえます。

目下の課題は、観光客の満足度をどれだけ高め、石垣島ファンになってもらうか、ということにつきまします。まちづくり会社としても、まちのホスピタリティを高めるために、商店街内に休憩施設を整備したり、市民ガイドによるまちなか散歩ツアーを運営したり、一時預かりのできる保育園を開設したりと、事業を少しずつ積み重ねています。最近では、アーケード商店街・ユーグレナモール内を無線LAN化し、Pad

濱のつばやき 『天岩戸開き』

五月二十一日。この日の朝、皆様はどのように過ごされたでしょうか？

小学一年生の頃、母にせがんで買ってもらった宇宙図鑑。幼すぎて文章内容は全く不明だったが、それでもイラストから伝わる星や銀河の美しさと荘厳さ、星々と宇宙の不思議・壮大さに、唯々魅入っていたのを今でも覚えている。

そんな天文大好き少年だった自分が久々に興奮したのが、この日見られるという金環日食。残念ながら日本海側は日食帯から外れている。その一方、多少土地勘のある静岡県遠州地域は、綺麗な同心円となる中心線が通っている。天候の影響など迷いはあったものの、思い切って太陽撮影専用フィルターを購入し撮影行に踏み切った。前日から車で移動し、ロケハン。富士山静岡空港の滑走路北端にやや高台となる展望施設があり、ここで撮影することに。大井川に掛かる木造橋世界最長の蓬菜橋、島田駅前の地域一番と評される鰻屋などを堪能して投宿。

翌朝6時半に空港に行く。…下写真のように既に大勢のカメラマンが陣取っている。幸い空港は開けているので駐車場脇でカメラを構えた。ところが北方角は晴れているのに、次写真のように



を使ったデジタルサイネージを設置、観光案内ができるようにしています。本土からの観光客はもちろん、台湾など外国のお客様にも大変喜ばれています。

一方、外に打って出る取り組みも進めています。「石垣島スパイスマーケット（ISM）」と称した島のものづくりチームで、「南国エシカルライフスタイル」というコンセプトのもと、都市圏の百貨店や駅ナカなどのイベントスペースに出展。モノの販売を通して石垣島をPRし、地域経済を持続的に活性化させようという取り組みです。有名な石垣島ラー油などの食品と、ジュエリー、ファッション雑貨など、異業種ブランドの集合体で、単体ではなかなか獲得できない販路を一緒に広げて開拓しています。現在は、定期的に石垣島から選りすぐりの商品をお届けする「石垣島のタカラモノ便」というネット頒布会の準備を七月のスタートに向けて進めています。都会の日常生活のなかに、島スパイス（＝非日常感）を届けたいという想いです。

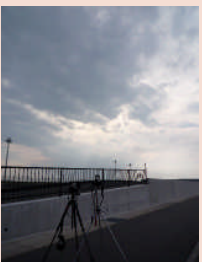
石垣島はその地理的な特性から、時に大自然や権力に翻弄されながらも、力強く生きてきた島の人たちの生活文化が色濃く残っています。日常と非日常を行き来する島の暮らし、ぜひ体感しに来てください！



【プロフィール】
(にしむら りょうち) 一九七六年滋賀県生まれ。都市計画コンサルとして、関西のまちづくりに関わった後、二〇〇四年石垣島に移住。多岐にわたる活性化事業のコーディネーターをしつつ、保育園園長としても奮闘中。Twitter: Ryoichir18。

東の空には厚い雲。刻々と「その時」は近づいてくる。こうなったら雲が切れるのを祈るしかない。

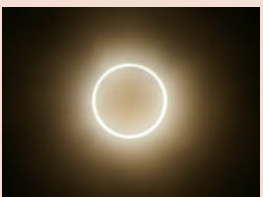
そんな願いが通じたのか、金環日食が始まる頃には時折太陽が顔を出してくれた。



札幌の中学時代。北海道に残る蒸気機関車の撮影をするため、道内各地を駆け巡っていた。列車の撮影はほぼ一瞬である。が、事前に他の列車で確認ができる。一方、日食の撮影はゆつたりと進んでゆくが、事前確認が難しい。特に今回は雲の厚さがめまぐるしく変わる。露出のバランスに戸惑った。それでも、月のクレーターに戸惑った。一瞬だけ現れるベイリービーズ。そしてど真ん中の日食を収めることができたのは、本当に有難かった。薄雲がかかり光がにじんで、むしろ美しい写真が撮れたのは、天の采配なのかも知れない。

雲間から覗く度に、じつと観察していると、天岩戸開きの如く月は無首で、しかし確実に移動してゆく神秘の世界。

この一瞬・たった一枚の写真のために、二日間で約九百km・十二時間を走っていた。



きただより52 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『誤訳多発の観光庁「東北観光博覧会」HPとその対応』

今年3月18日から、「東北観光博覧会」（2013年3月31日まで）が、「東日本大震災により大きな被害を受けた東北の復興に向け、国内外から観光客を呼び込み東北を元気にしていこう」との趣旨で開かれている。ところが、いきなりこの動きに水を差すことが4月14日新聞各紙に掲載された。観光庁の東北観光博覧会ホームページ（以下、HPと略）で英中韓各国語に誤訳があまりにも多いことから、一時閉鎖するというニュースである。英語での誤訳例をあげると、秋田県では「秋田 飽きた」、「生保内関所跡 生命保険における関所跡」、青森県では、「安瀧みなとまつり すべての安い瀧と祭り」、岩手県では「啄木忌 喪キツツキ」などである。秋田県男鹿市の「ナマハゲ体験講座」は、中国語訳で「はげ頭病の講座」と、低レベルの間違いばかり。

原因は、観光庁HPの受託業者が、自動翻訳機を使って突貫で作成し、受発注者とも内容の確認をせぬまま公開してしまった事らしい。業者、観光庁の担当者とも追い立てられていたのかもしれないが、さらに気になったのは事後の対応である。

観光庁HP、4月13日『東北観光博覧会ポータルサイト多言語版の一時閉鎖について』では、「多言語サイトについては、修正に一定の時間を要するため、一時閉鎖し、再開は4月下旬を予定」とした。続いて、4月20日『東北観光博覧会ポータルサイト多言語版の再開延期』では、「将来的な応用を見据え」、自動翻訳機の利用をあくまでも進める姿勢のまま、「固有名詞や方言等は、各言語について翻訳ボランティアによる確認を行う」としており、最終的にはボランティア頼みで、この段階で募集を開始するという。何とも呑気である。そして、HPの再開をさらに5月下旬に変更した。

秋田県の佐竹知事は4月16日の定例会見で「各県とも、英語、韓国語、中国語の観光案内文を、ある程度持っている」とし、HP公開を急ぐ観光庁が、各県に自動翻訳に適した統一形式で日本語データを求めたことを疑問視した。

青森県で、地域の国際化に多少関わった筆者としても佐竹知事の指摘に同感であり、20年ほど前からの地域の国際化推進のもと、各県をはじめ国際交流に力を入れていた市町村において、国際交流員、職員交流、研修などで多くの外国人が来訪し、数多くの観光パンフレットや地図、HPなどの制作に参画してきている。これらの地域ストックが、全く活用されなかったのは、惜しい。

今回の件で学ばべきことは、観光PRの手段としてHPによる情報発信の重要性が増す中で、誤情報発信が及ぼす影響の大きさへの認識と、それを招かない慎重さ、そして万一の場合の対応姿勢であろう。影響が大きいだけに、大いに恥も晒してしまう。何よりも東北復興のせっきくの企画が、出足でつまずいたのは残念でならない。

『2号店プロジェクト』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

2011年の3月10日(金)に目黒駅前にて『能登の夜市(よるいち)』を出店してから約1年ちょっと。前職の仲間や目黒に勤務されているお客様、そして石川県出身の皆様のおかげで、いきなり襲ってきた震災ショックも乗り越えて何とかやってこれました。ほんと感謝感謝です。

そして「調子に乗って」と周囲の仲間からは言われますが今年11月を目標に2号店の出店に向けて動き出しました。私としては「経営リスクの分散化」、「シナジー創出」が目的なんですけどね。と勢いよく動き出したものの、苦悩の連続なのです。

・コンセプトは？『能登の食材にこだわるといのは一緒だけど、より洗練された打ち出しをしたいなあ』『でも能登そのものって洗練されたイメージはないから、店名で能登を前面に出さない方がいいよね』

・業態は？『平日の稼働率を上げていくには立ち飲み業態かなあ。日本酒だけでニッチを狙うか』『立ち飲み業態って今は旬だけど、定着するモデルなんだっけ？』『日本酒だけだと市場規模が小さすぎでは？』

・ターゲットは？『1号店とは違う若い方達に日本酒と魚の旨さを伝えていきたいなあ』『今までの傾向として若い人ってワインは飲むけど日本酒は敬遠しがちだよね。』

・立地は？『稼働率勝負となると渋谷、新宿といった大型ターミナル駅だなあ。それも立ち飲みなら1階がマストだ』『渋谷、新宿の1階15坪程度となると家賃だけで40万円超か。初期投資で1500万円はかかるなあ』

・目標数値は？『渋谷、新宿での出店となると月商600万円は欲しいなあ。』『月商600万円となると地域一番店クラスか。能登・石川の食材だけでそこまでの競争力をつくれるのだろうか？』

・商品戦略は？『能登の食材を和洋折衷にアレンジして日本酒と一緒にパール形式で提供しようかな』『そのスタイルであれば顧客目線から見れば能登にこだわる必要性はないよね』

・PR戦略は？『フェイスブックを活用して近隣の企業や居住者にダイレクトプロモーションだな』『となるとインセンティブは必要になるか。いきなりディスカウントイメージはつけないなあ。』

・資金調達？『やっぱり能登の金融機関を利用したいな。いっそのこと登記も移して地元で税金が払えるようにしよ』『そうすると資本構成や役員体制の変更もいるな。結構手間とコストかかるなあ。』

こんな禅問答を繰り返し繰り返し行いながら、せっかくできた枠組みも自信が持たなくなって、また一から組立直す作業を続けている毎日です。

昨今のトレンドや業態の変化が激しい飲食業界では3年持たせることすら難しいと言われる中で、最後信じれるものは、これまでの経験で培ってきた想像力・直観力・決断力しかないんですね。

7月の半ばには上記のすべての項目に自分なりの最終解答が出ているはず。多分。。。。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

新潟・佐渡島のたび 2012/2 その3 静岡県職員 溝口 久

佐渡島初日は“金鶴”の加藤酒造、“真稜”の逸見酒造、“真野鶴”の尾畑酒造を試飲しつつ見て回った。ここ佐渡は良質の酒米が育ち、酒蔵が多い。佐渡の酒米は百万石と山田錦。1,2月の寒さ厳しいときに仕込まれる。そしてできたお酒は端辛口のすっきりとした呑み心地になっている。佐渡島で合流したラディッシュボーヤ酒造りの会『ら組』の女性6名は酒に詳しく、なにせ「何号酵母を使っているんですか？」なんてことを杜氏に尋ねた。訪ねる酒蔵での買いっぷり、懇親会での呑みっぷり、挙句の果てに3人ほど飲みすぎて場そのままダウンしているのだから、とても適わない。

懇親会場は宿ではなく、割烹だった。ここで出された魚が素晴らしかった。

春の産卵を控えて栄養を蓄えている寒の時期の魚は格別で、佐渡沖で獲れる脂の乗った寒ブリ、驚きは透明感を湛えた紅色に輝く南蛮エビのこれまで食べたこともない濃厚な甘み、「白身の王様」と呼ばれるノドクロ、他にもヤナギカレイ、マダラ、アンコウと佐渡沖ならではの刺身が並んだ。佐渡沖の海は信濃川、阿賀野川が運ぶ山からの栄養素がプランクトンを育て、寒流と暖流がぶつかる場所でもあり、これら魚が美味くないわけがない。我が静岡県も美味しい魚が豊富と思っていたが、ここ新潟には適わない。これに日本一の米どころのご飯が加わり、食魔亭小泉武夫流に言えば、まさに“悶絶もん”なのだ。

翌日も酒蔵見学からスタート。佐渡では一番の大手「北雪」に伺った。山越えをしたため道中は道と言うよりスキー場を走っている気になった。こちらでも例年にない大雪とのことだった。「北雪」のパンフに「佐渡を知り、佐渡を愛する私たちにしかできない酒造りに情熱を注ぎ、時代に相応する感性で新たな挑戦をし続けてまいります。」とあった。レストラン「NOBU」で出されている大吟醸「NOBU」、長期低温発酵の大吟醸「YK35」、喜太郎のシンセサイザーを聴いて熟成した「音楽酒」など新たな挑戦の酒が並ぶ。創業時の酒も売られているが、最近の磨きあげた酒米からつくる最近の酒を呑み慣れていると雑味が多くて遠慮したい。

ほど近い多田漁港で、「まさき食の陣」が開かれていた。会場では鰯汁が無料で振舞われていた。きじそばには行列ができ、どうもこの名物らしい。テーブルには漬物も置かれ、100円のご飯を買えば、鰯汁と漬物おらずに昼食にできる。地元の方が多く、会場に町民皆が出てきているようだった。ご年配の会場スタッフの気が利いていた。テーブルに溜まりがちな空いた器を、丁寧に声を掛け次々に回収してくれるのだ。分別収集コーナーはもちろん用意されているが、席を廻っての回収はこの手のイベントではあまり見たことのない光景だった。



さて、佐渡島と言えば、真っ先に朱鷺のことが頭に浮かぶ。

20世紀初頭には、中国、ロシア、朝鮮半島、台湾、日本など東アジア一帯に広く分布し、珍しくはなかった。しかし今では、野生の朱鷺は中国陝西省と佐渡で平成20年に10羽、21年にも20羽放鳥されたのみになっている。



平成15年に日本生まれの最後のトキが亡くなっている。平成11年に中国からつがいの寄贈を受け人工孵化に成功、その後順調に繁殖が進み21年には総飼育数が153羽になっている。

そのトキは「トキの森公園」にいる。そこには資料展示館、野生復帰ステーション（繁殖ゲージ、順化ゲージ、収容ゲージ、管理棟）がある。

ここからトキは自然に放たれ、野生復帰を目指すことになる。これにはトキの餌場を用意する必要がある。休耕田をビオトープ化、無農薬・減農薬の米づくりや冬期湛水などの取組がされている。そしてこの「トキの共生する佐渡の里山」が世界農業遺産「GIAHS」に国内で初めて認定された。GIAHSとは、次世代へ継承すべき重要な農法や自然景観、生物多様性などを有する地域を国連食料農業機構（FAO）が認証するものだ。佐渡産コシヒカリ「朱鷺と暮らす郷」と銘打って、市が減農薬・減化学肥料で栽培された米を「佐渡トキ認証米」としている。

野生復帰ステーションで見たトキが次々に佐渡の空を舞って欲しいものだ。今回は残念ながら外でトキを見かけることはなかった。

冒頭の「島の新聞」に話を戻せば、ここ佐渡島の独立論はまんざらでない気がする。新聞には「独立論を実現しているような都市がアメリカのポートランドだ。」との記載あり、おーまさに昨年7月に行ったポートランドのことではないか。最先端のエコシティとして注目されLRTが市内と郊外を結び市内への車の流入を抑制し、全米で最も電気自動車が普及し、エネルギー源は水力と再生可能エネルギー。充実したファーマーズマーケット、地産地消が確立し持続可能な農業が行われている。57万人の人口に市議はたったの4人、生活圏単位の自治会組織が95あって選挙で代表を選び、予算要求ができ地区を運営している。キーワードは「変わり者」。よそからどういわれようと自分のやり方を通す。10市町が合併して島一つの佐渡市になっている。新聞になるような佐渡流「変わり者」を見たいものだ。

2月の「にいがた食の陣」の佐渡島版に3月17～20日「よってけまつり・さど食の陣」がある。秋から春にかけ11月のまぐろが主役の佐渡さかなまつり、12月の海府寒ブリ大漁祭り、2月加茂湖カキまつり、食のイベント目白である。まさに、冬は佐渡に限る。（おしまい）